

## 武蔵野市エコプラザ（仮称）検討市民会議（第3回） 議事要録

- 日 時 平成29年5月31日（月）19時開会 21時閉会
- 場 所 武蔵野市役所811会議室
- 出席者 委員14名、事務局4名  
小澤（紀）委員長、鈴木（雅）副委員長、大沢委員、大谷委員、  
小澤（里）委員、上吉川委員、木村員、塩澤委員、志賀委員、新立委員、  
鈴木（圭）委員、田中員、長島委員、村井委員
- 議事等 1 意見交換 テーマ：「多様な環境活動・啓発について」  
2 報告事項 平成28年度エコプラザ（仮称）整備に向けたワークショップ等の実施結果について

### 1 意見交換

「多様な環境活動・啓発について」各委員の様々な分野での活動内容や、日常生活で気になっている環境のこと等から、エコプラザでやってみたいと思うこと、市民に伝えたいこと、等について意見交換を行った。

発言者	要旨
委員長	「多様な環境活動・啓発について」、皆さんのご意見をいただきたい。ご自身の環境活動や経験も踏まえてお話いただき、「エコプラザでこんなことができるのではないか」ということにも触れていただきたい。前回の議事録（資料3）をお配りしているので、読んで思い返していただければと思う。
委員	小売りの立場からお話すると、食品や商品を作り・売る→食べる・使う→捨てるという循環の中で、結果的にごみを排出していることを、知っているようで知らないのが実態。自社では年2回エコ検定を実施し、環境に対する意識を高める取り組みを推奨している。そこで得たことを企業人としてだけでなく、親として子どもに伝え、いろいろな場で活用してコミュニケーションを循環させることで、さらに広まる。 また、エコプラザだけでなく、店で買い物をしながら、環境を実体験してみても良い。環境の入り口から入らなくても結果的に良いアウトプットにつながり、行動に結びつくように、我々小売店とも自由に連携することは、すぐにもできることだと思う。
委員長	90年代にある流通業界の店舗に子どもたちを招き、企業がどのような努力をしているかを評価してもらったが、お互いにとても良い学びになったという経験がある。 「エコにこ学習」というプログラムを作り、商品の価格が高くなった時に、バックヤードでどういった対応をしているか、未来の消費者に対してのアピール

	してもらった。
委員	<p>生ごみをどうにかしたいと思い、家でミミズを飼い始めた。また、震災で計画停電になった際には、介護している父と一緒にいたためかなり困り、太陽光発電を付けたいと思い、売電ではなくスタンドアローンで太陽光発電を設置した。その経験から、こうした行動は、環境からではなく、自分が必要だからやるのかなと思った。</p> <p>一方、企業としては、「冷房の温度を27度、28度に下さい。」と言われても、お客様のために涼しくするのでなかなか上手くいかない。</p> <p>子どもは親を見ているので、今の子は環境にこうるさくなっている。大人に対して働きかけることも重要だが、子どもの時からしっかりと教育を根付かせていくために、大人が努力し、次の世代に引き渡していく必要があると思った。</p>
委員	<p>5月27日に吉祥寺南町コミセンでゴーヤの苗の無料配布会を行った。渡すだけでなく、「温暖化についてのミニ講座」を15分聞いてもらった。全部で3回行い35人ほどが参加した。</p> <p>「地球温暖化学習会」に来る人は、温暖化についてかなり詳しく意識が高い人が大半で、「省エネ入門講座」も、省エネ免許皆伝の達人みたいな人達がたくさん集まっている。これでは成果を出したことはないと思います、どうやったら伝えられるかということを考えて今回の取組みを行った。</p> <p>温暖化問題に限らず、環境に関する情報を伝達して意識を変えたいという取り組みであるという点は、他の取り組みにも共通していると思うが、来た人の数ではなく、本当に成果を出したかということにこだわって、やっていくことが必要だと思う。</p>
委員長	<p>人の数ではなく、本質的なことをきちんと学習して、共感して行動に移していくというのは大事なこと。先ほどのコミュニケーション、あるいは親の姿を見て子どもが行動するというように、大人が率先してやることによって、子どもへの影響もあるかもしれない。</p> <p>一方、年配の方で、「あれもダメこれもダメ」と言われて、「やることがない」という声もあるので、自分の日常的な行動が、どう温暖化に結びついているかを知ることが大事なかもしれない。日本人の特性として、そこまで追求して学ぼうとする意欲がないということがある。そういった意味で、新しいクリーンセンターの周辺に、なぜ緑を植えているのか、あるいは武蔵野市全体ではどうか、あるいは東京全体で考えるとどういう構造になっているのか、ということも考えていくような展開が必要かもしれない。</p>
委員	<p>「クリーンむさしの」の活動の一環で、スーパーのトレーの店頭回収の実態調査をしたことがある。20～30代の若い夫婦が熱心にやっていて、その理由をヒアリングしたところ、小・中学校の環境教育がきっかけで、習慣として身に</p>

	<p>ついているとのことだった。高齢者と比較すると、環境教育を受けたか受けな いかで、はっきりとした違いがあると思った。</p> <p>私たちも、子どもたちへの環境教育を少しずつ始めている。学校の教育では なく、私達地域が環境教育のお手伝いをしていきたい。必要なのは、子どもの 教育と、年寄りの啓発。</p> <p>高齢者の啓発は、難しい問題で、色々な先入観があり、一人ひとりの歴史が 違い、受け入れ方も違う。私は地域の活動を高齢者だけではなく、大人も子ど もと一緒に、環境学習へ手を広げていければと思っている。</p>
委員長	<p>環境基本法の 25 条には、「教育」と「学習」という 2 つのキーワードがあり、 教員も自ら学習している。26 条が市民向けの教育で、1988 年に環境省は、市 民向けの冊子も作っている。それが企業の中にも根付いて、銀行や企業が環境 に投資をするということも議論されてきている。</p>
委員	<p>イベントでやることと日常的な学びの、中間のプログラムができないか。継 続できて、かつ楽しくて、魅力的なことが、環境に関してあるように考えてい る。</p> <p>人はどうしても知識に偏る部分があり、そこに至るまでの食指をそそられる と動く。例えば、食品ロスを減らすために賞味期限切れのものをデパートで売 っているというニュースをみると、多くの人が殺到する。自分も台所を調べて みたら、1 年ほど前のものがたくさん出てきて、捨てる際に罪悪感を感じた。 人は、テレビであおられると動くし、お得だと言われるとたくさん買ってきて、 また 1 年放っておいたりする、そういう習性があるのかなと思う。</p> <p>クリーンセンターで実施するエコ・マルシェのあり方なども含め、世間的な 流行りとも違い、教育的なものだけでもない、環境啓発ができないか。更に持 続性があれば良いと考えている。</p>
委員長	<p>環境学習でも教育でも、正解を求めている訳ではなく、プロセスで共感して、 意識改革をして、行動をしていくということ。私は、環境学習はプロセス学習 だと捉えており、前回の副会長が話されたメタボリズムの考え方は、大事な指 摘をいただいたと思うので、そうした視点も加味して進めていけたらと思う。</p>
委員	<p>私は、エコプラザの活動が、エコプラザだけで完結するものではないと思 っている。市民一人一人が、それぞれの家庭や地域で、それぞれ活動をして いく、そういった状況をつくる、そのような水平展開型の自主的な活動を多様 につくっていくことが大事で、そのきっかけをつくるのがエコプラザだと思っ ている。環境に関するテーマはいろいろあるが、その点はどれも同じだと思う。</p> <p>福島県いわき市の公立劇場では、かえっこを開発した藤浩志さんが「モヤモ ヤ会議」を実施した。市民が「こんなことできたらいいな」というモヤモヤし た思いを持ち寄って、参加者皆と一緒に考える場で、そこから、いくつかの活</p>

	<p>動が始まっていった。震災後は、モヤモヤ会議参加者が独自に様々な復興支援活動を始めた。例えば、「映画祭をやりたい」というモヤモヤの種を持ち込んだ市民が、その後実際に映画祭を開催するに至ったが、震災後自主的に避難所でビデオの上映会を行う活動に取り組んだ。そういったきっかけを作る場になるといいと思う。</p> <p>環境問題だからと大上段に構えて大がかりなことをするというのではなく、むしろ「こんなことをしたい。こんなことできたらいいな」という市民のつぶやきに、聞く耳を持つ人がいたり、ちょっと世話を焼く人がいたり、そういう場になると、水平展開がしやすいと思う。</p>
委員	<p>市役所の隣の「武蔵野緑町パークタウン」に住んでいるが、この団地は建て替えをして20年目になる。私にとっての環境活動の大きな転機が、自治会の建て替え対策の活動だった。当時、既に築30年以上経っていたため、UR都市機構が提案してきた計画案は、全面的に新しい効率的な高層住宅団地をつくるというものだった。家賃も高くなり、居住者が住み続けられるか、住環境がどうなるか不安になり、大変な状況だった。そこで、自治会では「どんな団地にしたいか」各棟で話し合いを重ね、都市機構と交渉するために間取りや住環境など問題を分け、プロジェクトをいくつか立ち上げた。</p> <p>その1つ、「環境プロジェクト」は、幼い子どもを持つ若い主婦たちを中心に結成された。若い主婦達は、子どもが団地でどう過ごすか、危険な場所、子どもが好きな場所など、団地のことをよく知っており、ネットワークももっており、エネルギーもある。専門家を招き、子どもたちと一緒に団地の中を観察して回り、「私たちが住んでいる団地はこんなに素敵なおところ」ということを絵や写真で表現したパネルを作り、様々な場で展開した。「この団地が好きだ」ということを、同じ居住者や都市機構の人にわかってもらいながら、交渉を進めたところ、都市機構が最初の計画案を見直してくれた。修正案は私たち住民の意図をかなり汲んでくれたと思う。私たちの交渉の趣旨は「土と緑とコミュニティー」、長年の話し合いの結果守りたいのはこれなんだと行き当たった。20年経った今もそれがコンセプトである。以来、私は自治会活動を続けているが、そのコミュニティー活動こそが環境のための活動だと思っている。</p> <p>みんなで団地内を一緒に掃除したり、夏祭りで出たゴミをどうしたら減らせるか協力して考えたりすることは、子どもも一緒にできるし、すごく楽しい。前回の委員長のESDの話聞いて、もしかしたら、こうしたコミュニティー活動がESDにつながっていくのかなと気付いた。</p>
委員	<p>「水の学校」は、水のことに関して様々な角度から、イベントと学習の中間のようなことをやっている。座学だけでなく、半分は現場に行って、水再生処理センターや武蔵野市の水源でもある奥多摩湖などに行き、楽しみながら学ん</p>

	<p>でいる講座。現場に行くだけでなく、その後にブレストの時間を設けていて、受講生がその場で気づいたことを話す中で、自分では気づかなかったことに気づけたり、他の人の気づきになったり、「こういった見方もあるんだな」ということに気づかされたりすることもある。</p> <p>汚水処理については、水再生センターを見学するまでは、当然、薬剤を使って処理していると思っていた。ところが、微生物が分解して処理していることがわかった。なぜ、油を流してはいけないのか、漠然としていたが、微生物が処理できないからということを知り、衝撃を受けた。そのような気づきの場所を与えてくれたのも、「水の学校」だった。「水の学校」には、1年間の受講を終えた修了生たちが、その後サポーターとして参加している。「みんなに何を伝えたいか」ということをまとめた資料を一回作成したが、広く配布できなかったり、広報できなかったり伝えきれていないというのが課題で、その辺りを考えていかななくてはいけないと思っている。</p>
委員長	<p>微生物が処理している姿を顕微鏡で見ると子どもたちも感動する。そこに、「なぜ」というところがあって、次のステップにつながっていくと思う。そうした気づきをみんなで共有し、行動変容につなげていくことが必要。</p>
委員	<p>実家が空き家になっているため、庭木がゴミにならないように、時々花を伐って近所に差し上げることにしている。家にはとにかくものがたくさんあり、3年かけて整理している。桐の引き出しをプランターに使ったり、捨てようとしていた板を表札にすると外国人の学生が喜んで受け取ってくれたりするので、「空き家＝ゴミ」ではない、次のステップにつながる上手なシステムができれば良いと思う。</p>
委員長	<p>着物を入れていた桐がどうして日本の気候風土に合っているのかということ、湿度の多い時には除湿作用があり、乾燥時には水分を放出するという、そうしたことを、子どもたちや外国の方にも伝えられると良い。</p>
委員	<p>啓発をしていく上では、実はプラスの要素よりも、マイナスのイメージの方がインパクトがあると思っている。</p> <p>子どもの頃、瀬戸内海で育ったが、夏になるとたまに赤潮が発生して、魚が浮いていたり、近くの煙突から黒い煙が出ている様子を目にしていた。そういったマイナスの要素は、今でもしっかりと覚えている。武蔵野市で暮らしている子どもたちは、東京都の中でもとても住みやすい環境にあるのではないかと思う。公園や緑も多いし、近所の川にはザリガニもいる、バスから黒い排気ガスが出ていることもない。武蔵野市に住んでいると、普段環境に対してそれほど問題意識を感じることはないのではないか。</p> <p>環境面で問題意識を感じるのは、都会に住んでいると、ゴミの問題が一番大きいと思う。マンションには、ゴミ専用の建屋があり、そこに分別してゴミを</p>

	<p>出すが、ゴールデンウィークには、あふれんばかりの量になってしまい、これは正しい姿なのかと疑問を感じる。ゴミ捨ては私の役割なので、子どもたちは見ていないが、そういった負の要素を、子どもたちに実感してもらった方が、良い部分と悪い部分のギャップを感じて、問題意識を持ってくれるのではないか。</p>
委員長	<p>子どもたちの気づきを促すには、良いところだけではなく「あれ？」と思うところを含めて、気付かせるということも必要。未来に向って大人になる子どもたちに、マイナス的なところが積み重なり、グローバルな問題として、温暖化などにもつながっていくということも伝えられると良い。</p> <p>生物多様性の資料も入っているので、その辺りも含めて議論していけたらと思う。</p>
委員	<p>環境系の NPO の活動をしていて、私が感じたのは、体感すると若者たちは変わるということ。中学生から大学生を対象に、一泊二日のキャンプを行い、自然の中で山に登ったり、川で水を汲んだりという経験をすると、環境の偉大さに気付く。暗くなったら「電気がないと何も見えない。電気ってなんてありがたいんだろう。」とか、喉が渇いて山の上で水が全然なかったら、「これは困った。水を運ぶというのは、すごく大切なんだ。水道があるということはこんなにありがたいんだ。」といった日常の環境の大切さを、体感によって気付く。ただ、子どもたちは忙しく、一泊二日の時間を取ることは、ハードルが高かった。</p> <p>エコプラザに期待することとして、「市民に、こういった環境のことを考えられる人になってもらいたい」という理想像をつくり、その入口から理想像の人物に到達するまでのジャーニーを考えられると良いと思う。入口としてエコプラザ等気軽な場所で見てもらい、その後、本で調べるのが好きな子は本などで知識を得たり、体験が好きな子はキャンプ等に参加して実体験として感じたり、学校などとも連携して、様々な道筋が作れたらよい。いろいろなところと連携して、エコプラザの位置づけというのも考えていけたら良いように思った。</p>
委員	<p>この会議がどう推移しまとめていくのか心配している。学校の代表として出ているが、どうやって学校教育に位置付けるのか、方向性が見えない。</p> <p>子どもへの教育という意見があるが、「教育」というとすべて学校になってしまっていて、防災教育、消費者教育、安全教育、税金についての教育、インターネット等、たくさんのことがありすぎて、大変な状況。総合学習の時間があるが、これから小学校に英語の教科が入ってくるという話もあり、なかなか集中できない環境にある。</p> <p>エコプラザも、いろいろな啓蒙活動をしなくてはいけないとは思いますが、無駄なものは作らない、持たないというのが原点だと思う。私の職場でも、余計なものを置かず、文房具でも紙でも、わざとなくなる寸前に置くようにしたら、</p>

	<p>ものを節約する気持ちが教員側に生まれてきた。それぐらい心理的な効果がある。今は、スーパーなどに行けばものがあふれている時代で、ものが多い中で、啓蒙活動を進めていくのは大変だと思うが、いろいろと意見を言っていきたい。</p> <p>リサイクル活動をしていると、ペットボトルを捨てる時、洗うのにたくさんの水を使う。同僚と話をした際、リサイクルにこんなに水を使うなら、しない方が良いのではないかと、水がもったいないという意見が出た。どっちが良いのかという本質的なことを発信する施設があってほしいと思った。「リサイクルをしないと、どうになってしまうのか?」、今の最終処分場がいっぱいになったらごみ捨て場がないということを全面に出して、危機感を持ってアピールしていかないといけないと思う。</p> <p>特に、温暖化についても、アメリカの大統領は温暖化に関心がないようだが、「そんなことはダメだ」と言える何かを持たないといけないと思う。</p> <p>最近、ペットを捨ててしまうモラルのない人が多く、そういった行動によって、生態系が脅かされていることに対し、非常に憤りを感じている。</p> <p>学校で動物を飼育するなど、やれることをやって、大人が見本を見せることで、子どもは学んでいく。そういうところで、もっとわかりやすく発信していかなければいけないと思う。</p>
<p>委員長</p>	<p>「どっちが良いの?」という比較はとても大事なこと。学び方のプロセスで体験を積み重ねて、それがどう次のステップにつながるかということも学ぶことも大切。</p> <p>最初に副委員長がおっしゃった、「もしも処分しなかったら、市内にどのくらいゴミがたまるか」というような、データを示しながら展開していく手法もあると思う。</p> <p>学校にすべてを押し付けるのではなく、主体的な学びをするために、このエコプラザは地域における学びの場として、お互いに学び合う関係づくりの場として、そういったところを、ぜひ取りまとめていきたい。</p> <p>方向性が見えないということについては、初めて顔を合わせて、はっきりと明確に打ち出すと、行政が書いたシナリオ通りに進めることになる。コンセプトを皆でまとめていく中で、非常に多様な視点が入るので、どんなふうに、誰が、運営していくのかという点も、皆さんの総意で、まとめていきたいと思う。</p>
<p>副委員長</p>	<p>環境の問題はすごく難しく、正解があるという前提で話すと、大体当たらないし、正しいか間違いかを決めるのも難しい。例えば、水を微生物が処理しているのを見て驚いたというのは、素晴らしい発見でとても良い話だが、一方で、微生物は菌で、菌というと悪いイメージを持ってる人もいる。「良い、悪い」や「人間にとって」など、そうした価値の概念だけで環境を捉えると、間違えてしまいやすい。</p>

	<p>子どもへの啓発でも、上から目線で「教えるんだ」とか、「これが正しくて、これが間違っている」、「こういうことをするにはこういうことをしたほうが良い」などと、答えを一つに決めることについて疑問を持っている。地球温暖化も、科学的なメカニズムがすべてわかっていて、危機としてどんなことが起こるかということが解明されているかという、そうではないが、「地球温暖化」というと、悪いことだと思ってしまう。もう少し冷静になって、調べたり、研究したり、「自分が研究者になって、追及するんだ」という立場の人達がいなくていけない。「地球温暖化というのは、こうです」と全部教えられてしまうと、新しく研究する必要がなくなってしまう。教えるということは実はとても怖いことで、吹き込んでしまったり、わかった気になってしまったりする可能性がある。</p> <p>生物多様性についても、生物の種が多ければ良いと言っていたり、外来種がどうして問題になっているのかという前提を知らないで、「外来種＝悪」という思い込みがあったりすると、結局、それに対応する方法論もうまく見つけられなかったりする。ここでは正しいことでも、別の場所では正しくないこともある。そうした意味で、価値の一元化を追求しようとする、環境問題は語れなくなってしまう。</p> <p>また、武蔵野市が排出している CO2 の量をどうするかということについても、市役所が使っているエネルギーや、そこから発生する CO2 を積み上げると、年間何トンという量になるが、一方で、ある自治体では、発電所 1 日の稼働で、武蔵野市が 1 年間で発生させる CO2 とほぼ同量の CO2 を出している。武蔵野市が 1 年で 10 パーセント減らそうと考えても、その自治体が 1 日に出す CO2 から考えると、ほとんど誤差の範囲になる。</p> <p>ミクロにももの考えることとマクロにももの考えることを、バランスよく考えないといけない、生活の視点だとミクロの視点になってしまう。マクロの視点でこうだから、ミクロは捨てて良いという意味ではなく、冷静に、バランスよく見比べると、桁を合わせてものを見るようにしないと、きちんと把握することができなくなってしまう。環境に良い取り組みをして、積み上げていっても、結局は環境改善に繋がらないといふことは、往々にしてある。</p>
<p>委員長</p>	<p>いろいろな視点から、皆さんの意見をいただいたので、整理していきたい。エコプラザにどういう機能・内容を持たせていくかという所にシフトしていくためには、まずはいろいろ考え方があるということを前提にして、今日は無理にまとめるということはない。</p>
<p>委員</p>	<p>現在の場所をクリーンセンターにするというのには紆余曲折あり、結局、今の場所になった。周辺の緑町三丁目・北町五丁目・武蔵野緑町パークタウン（当時の武蔵野緑町団地）の 3 団体と、市とで運営協議会をつくり、クリーンセン</p>



	<p>ターの運営をチェックしたり、周辺の環境について話し合ったりする機関として機能してきた。現在、30周年記念誌を作っているが、20周年記念誌には、地域のことや住民の苦悩、武蔵野市のごみの変遷もわかるので、ぜひ見てほしい。私は運営協議会だよりを編集しているが、市民や3団体の委員と話し合って発行している。このような発行物は他の清掃工場にはない。この30年間2ヶ月に1回会議をしている。地域住民は、当初単なる迷惑施設という思いがあったが、ただ反対するだけでなく、見守っていかなければならないと思うようになった。運営協議会を通して市とのパートナーシップが育ってきた。こうした運営を継続してきたことも素晴らしい。様々な施設を視察したが、こんな運営をしているゴミ処理場はない。運営協議会という団体が支えてきたことと、こうした形で武蔵野市が運営してきたということを知っていただきたい。</p>
<p>委員</p>	<p>環境問題と一口で括ること自体に無理があり、科学的な知識がある程度確定しているものもあれば、そうでもないものもある。一つ一つ問題ごとに状況が違い、影響度合いも違うので、「環境問題とは」と一般的に言うことに意味があるのか疑問がある。</p> <p>これまでの意見交換で、様々なジャンルのことが出ているが、この会議で優先順位をどう決めて進めるのかということ、頭のすみに置いておきたいと思っている。</p> <p>環境問題をグローバルにみると、一番ポピュラーなキーワードが「持続可能性」だが、武蔵野市だけが持続可能になるとか、我が家は持続可能な生活をしているというのではなく、社会全体の中の一部として、コミュニティー、ローカルなエリアを超えて、グローバル、あるいはナショナルな問題として考える必要があると思う。</p> <p>先ほど、温暖化については、そのまま信じてはいけないのでは？というご発言があったが、IPCC ※の論文などを一通り読むと、そうではないということが分かっていただけだと思う。基礎的な情報の共有が非常に重要だということ、を改めて認識した。</p> <p>今会議では、箱モノを中をどうするという話をするのかと思っていたが、前回の委員長の話聞いて、箱モノの設計ではなく、機能の設計、言い換えれば、広い意味での環境教育の設計を考える場だと思った。きっかけを作って水平展開という話に繋がるとし、そうあってほしいと思う。気候変動の問題で言うと、成功モデルができてないので、水平展開する前に、そうしたモデル機能をエコプラザが持つということなのかなと思った。</p> <p>環境という言葉にはいろいろなことが含まれるが、「環境問題」となるとネガティブなイメージになってしまう。「自然環境」というと、ポジティブになり、文化や、豊かさ、楽しみということに繋がる。環境という言葉には、ポジティブ</p>

	<p>ブとネガティブの両方があるように感じる。</p> <p>※IPCC：気候変動に関する政府間パネルの略。人為起源による気候変化、影響、適応及び緩和方策に関し、科学的、技術的、社会経済学的な見地から包括的な評価を行うことを目的として、1988年に国連環境計画（UNEP）と世界気象機関（WMO）により設立された組織。</p>
委員長	<p>客観的な事実に基づいてクリティカルに問題を考え、議論を進めることが重要。温暖化については、IPCCで報告されているように、95%の確率で人為起源（日常あるいは産業構造から出ている）と言われており、偏西風の動きなど、あちこちでいろいろな気候変動が起きている。</p> <p>気候変動を考えただけでも、地球のあちこちで様々な問題が起こっているということを考えなければいけないし、しなやかに考えていく必要がある。我々を取り巻く課題は、どんどん複雑になってきていて、単純に知識だけでは展開できない。唯一絶対の解があるわけではない。前回、私と副委員長からお話したように、すべて完成したものを作るのではなく、一つ一つ積み重ねていく「メタボリズム」と同じ考え方が望ましいと思っている。</p>
副委員長	<p>クリーンセンターの運営協議会の活動そのものが、世界に誇れる内容だと思うし、その歴史がクリーンセンターの今を支えていると捉えれば、新しく考えるというのではなく、それまでの歴史の上に立って考えていけば良いと思う。</p> <p>今までの蓄積のコンテンツをもう一回咀嚼して、ビジュアルに見せられるようにするとか、そういうものからもう一回抽出できるようなことを出してみると良い。また、今までの記録を束ねるだけでなく、そこからもう一回デザインし直してみたら、すごく良いものになるのではないかと思う。エコプラザができた時に、何か展示するにしても、重要なコンテンツになる。</p> <p>様々なスタンスがあり、正しいとか悪い、間違っているとか、そういうものを判断して選別して、持ってこようとしても、その基準がない。なので、私の場合は、環境に関する話題や提言、データ、意見は、まず一回受け止める。ここでは「良い・悪い」、「正しい・間違っている」という判断はしない。何でも受け入れて、10年、20年やっているうちに、だんだん一つの真理が見えてくる。例えば、すごく極端な意見のイベントや展示をしたら、反論が出ると思う。その時には、反対のイベントや展示を受け入れる。そうしたことを繰り返すうちに、一つのコモンセンスが出てくるかもしれない。そうやって、この中身を決めていったらどうかと思う。ガイドラインを設けない受け止め方を提案したい。</p>
委員長	<p>活用する建物の見学で2階を初めて見て、すごく良いワークショップの場所になると思った。離れた地域の方にも興味を持ってもらうためには、どうした</p>

	<p>ら良いのか、水平展開、異種の文化が混じり合う場として、新しい価値をつくったり、共有していく場としてのデザインもあり得ると思う。事務室だけのイメージでいたが、広い空間があり、とても触発されたところがあった。</p> <p>「エコ・マルシェ」では、新クリーンセンターの屋上と地下も見学できるので、イメージを膨らませるためにも、行っていただけたらと思う。</p> <p>新クリーンセンターの焼却時に出来たエネルギーは、市役所、体育館、緑町コミセンなどで使われているので、そういったところも考えると、一つのトピックだけを考えるのではなく、様々なトピックを通して、お互いに学び合いの関係性をつくっていったら良い。</p>
委員	<p>広いプラットホームと2階の事務室を見た時に、壊せる壁と壊せない壁があるという話があった。多岐にわたって様々な環境があるので、それを行ったり来たり、いろいろなものが混ざるような、複雑系の学びができる面白いかなと思った。</p> <p>具体的な空間性としては、プラットホームの大空間と、2階の広い会議室が1枚壁で隔てられているのが、見える関係になると良いと思った。芝生広場は一か所の出入口でしかつながらないと聞いたが、もっと芝生広場とつながるといいねという話が他の委員からもあった。2階でワークショップを行ったりした時に、下を見るとプラットホームが見えるというような、見る・見られる関係や、全体としてつながってくるような、そうした空間性があると良いと思った。</p>
委員長	<p>本市におけるクリーンセンターの運営は、他の自治体にはないもの。非常にインテリジェンスの高い武蔵野市民が、新たな価値を日本全体、あるいは海外に向けて、そのインテリジェンスを結集して、廃棄物問題に取り組んでいる。今まではライフスタイルを変えようという言葉だけが先行し、行動につながるものが少なかった。「できるところから」という言葉がるように、変革・変容はなかなか難しい。皆さんの持っているしなやかさを生かし、他の自治体にはない市民の意見をぜひ反映させてほしいと思っている。</p> <p>今日、空間を見て、改めていろいろな活用の仕方、コストのことなどを考えた。</p> <p>行政としては、予算書を議会にかけて通らないといけないという社会基本の仕組みがあるため、そこに楔を打ち込むようなことをしなくてはならないと思う。</p>
委員	<p>水平展開というご意見があったが、「みちまちみどり」という冊子を発行しており、市内外に約300か所に、置かせていただいている。1万部出るようになり、新たに企業や商店さんが置きたいと言ってくださっている。以前、市立の植物園がほしいという話が出たとき、武蔵野市は面積が小さいからまち全体が</p>

	<p>植物園だと思えば良いという話をしたことがある。まちの中で珍しい木が武蔵野で育つという発見があり実践的に感じる。エコプラザもそこが中心になり、まちのあちこちに小さな場が出来て、環境のことを感じられると良いと思う。今、雨水タンクを利用した花壇づくりをしているが、作業をしていると、通る人が「いいですね」と言ってくれる。そこで「武蔵野市は、雨水の取り組みをいろいろしているのだから、そのタンクを使って宣伝しちゃいましょうよ」と下水道課の方にお話した。環境についてのヒントがまちのあちこちで見られるようになってほしい。</p>
<p>委員長</p>	<p>とても良い発想。武蔵野市では、こうしたことがやりやすい環境にあるかもしれない。その発想を皆で共有できると良い。</p> <p>雨水のことも、なぜ杉並の地域で溢れるのか、杉並区を歩いて、善福寺川の地形的なものを考えると、よくわかる。6つの自治体が雨水を地下浸透にする協定を結んで対策もしている。こうしたことに、危機意識を持たせるのか、あるいは、「雨水で緑が育つ」といったプラスの方向から考えていくのか。発展すると、この武蔵野市の水道は地下水が何割というような、そうした発想につながっていくかもしれない。マイナスからいくか、ネガティブな情報からそれをプラスに転じていくか、という学び方につながる可能性がある。</p> <p>まち全体が博物館、企業が冊子を置いてくださっていると、銀行の待合室で、冊子を見て何かを知り、「ここに行ってみよう」となることもあり得る。私もブラジルの木がここにあるなんて、今日初めて知った。そういったことも大事なこと。</p> <p>今日いただいた意見を、事務局で、私もお手伝いしながら、カテゴリー別に整理し、事前に皆さんにお伝えする。次回に膨らませて、別の資料などもあればそれも提供していただいて、議論を深める機会にしていきたい。</p>